

保育士養成課程に在籍する学生の性役割認知と保育観

芝崎 良典

Sex-roles cognition and belief in pre-service early childhood teacher training courses

Yoshinori Shibasaki

本研究は保育士養成課程に在籍する学生 (N=71) の性役割認知と保育観との関連について検討した。第1の目的は性別により性役割認知にちがいが見られるか否かを検討することであった。MFH-scale (伊藤 1983) を性役割認知の測定に用いた結果、Masculinity, Femininity, Humanity のいずれの性役割認知の得点についても性別のちがいによる差はみられなかった。また、第2の目的は性役割認知のちがいにより保育観にちがいが見られるか否かを検討することであった。各性役割認知得点に関して各算術平均値を基準に各調査対象者を上位群と下位群とに分類した後、Child Centered orientation Belief Scale と Basic Skills orientation Belief Scale 得点に関して、性別および性役割認知得点の上位・下位をブロック因子として2要因分散分析を行った。結果、Child Centered orientation Belief Scale の得点に関してのみ性別の要因と上位群・下位群の要因の交互作用効果が唯一有意水準に達した。LSD 検定を用いて下位検定を行ったところ、Femininity の低い女性 ($M=2.51$) はFemininity の低い男性 ($M=2.31$) に比べてChild Centered orientation Belief Scale の得点が高いことが分かった ($p<.05$)。

キーワード：男性保育士，幼児教育，性役割認知

問題

過去、保育職は“保母”と呼ばれており、保育という職域は女性が担当するものととらえられてきた。その女性職に男性が参入することが法的に認められたのは1977年であった。児童福祉法の13条第1項の規定を男子について準用することによって男性の参入が実現したのである(資料1)。しかし、その施行から20年以上経過した今日においても男性保育士が全体に占める割合は1パーセント程度に過ぎない。保母という名称が1999年以降男女共通の名称“保育士”に変わるなど男性保育士が参入しやすい状況に変わりつつあるにもかかわらずである。

中田(2002)は少数派であることによって男性保育士が不利な立場におかれがちであると分析している。ある集団に異なる特徴をもった存在が参入するとそのちがいが目立ち多数派の凝集性が高

まることを対照性という（中田, 2002）。男性は少数派であるために“男性”保育士の典型例として注目され、あらゆる行動が“男性”的な行動ととらえられ、“男性”としての意見を求められる傾向があるという。男性としての行動・意見とは圧倒的多数派である女性保育士とは異なる行動・意見である。しかしながら、女性保育士の見解と異なる行動がすべて受け入れられるかと言えばそうではない。例えば、中田（2002）は乳児保育の方法に関して男性保育士と女性保育士との意見の対立のエピソードを挙げている。当初は男性保育士と女性保育士の1対1の対立であったが、直ちに男性保育士1名と多数の女性保育士との対立に発展したというエピソードである。園の文化や伝統に合わない行動を男性がとった場合、その行動は“男性”的で異質であるとみなされ、圧倒的多数の女性保育士からの攻撃にあうというのである。なお、現役男性保育者である菊池（2002）も、“少数派である男性保育者は、多数派である女性保育者から「少数派らしい（男性らしい）」行動を期待され、少数派自身も「少数派らしい（男性らしい）」行動をとろうとするのだが、人数比の顕著性に阻まれ、いまだ保育所などで居場所の確保や周りからの重圧に悩んでいる”（菊池, 2002, p. 211）と男性保育士の苦しい現状を報告している。

中田（2002）および菊池（2002）は共に、男性保育士が職場の人間関係に悩むことが多いのは男性保育士が圧倒的少数派であり、彼らの行動や意見が男性性を帯びたものであることを期待されたり、認知されたりすることにあると考えている。つまり、男性保育士の男性性は男性保育士が元来もつ特性の自然な発露というよりは、周りの女性保育士からの期待に応えようとするうち徐々に形成されるととらえている。もっと言えば、保育現場に入る前には男性保育士と女性保育士とはその行動・意見に関し性差はないが、その職場環境により男性保育士は男性らしい行動をとろうとするようになる。このようなとらえかたは、“自我は一般化された他者としての役割取得に従って相互作用の中で発生・確立”すると主張したミードの見解（中田, 2002）に沿ったものであり興味深い。ただし、以上の想定は青年期の性役割認知に関する実証的研究（伊藤, 1983; 柏木, 1972, 1974）と相反する可能性をもっている。

伊藤（1983）は青年前期から成人期までの男女を対象に、青年期における性役割認知の発達過程を検討している。結果、高校生・大学生といった青年期においては性役割認知に性差が存在し、男性は女性よりもより男性性を重視し、女性は男性よりもより女性性を重視するという結果を報告している。保育士として始めて保育所に勤務することになる年齢は専修学校卒業後の20歳あたりである。仮に伊藤（1983）の調査対象者であった青年たちと保育士を志望している青年男性の性役割認知にちがいが無いとするならば、男性保育士は働き始めた時点から女性に比べて男性性を重視しているはずなのである。

しかしながら、仮に保育士を志す青年男性は一般男性に比べて固定的な性役割観念から比較的的自由であるという可能性も考えられる。一般的に言えば確かに青年男性は女性に比べて男性性を重視する傾向があるが、その中でも女性職とみられがちな保育士を志望する青年男性は男性性を重視する傾向が小さいという可能性も考えられよう。そこで本研究では、保育士養成課程に在籍する学生を対象として、性別により性役割認知にちがいが見られるか否かを検討することを第1の目的とする。また、性役割認知のちがいによって保育観にちがいが見られるとするならば、女性職として保

育士をみる傾向がいまだ残っている現在においてはやはり男性性を強調することは男女間での保育観のずれを生むこととなり、男性保育士を保育現場での立場を悪くすることにつながるとも考えられる。そこで、性役割認知のちがいが保育観にちがいが見られるか否かを検討することを第2の目的とする。

保育観

幼年期教育のアプローチは、保育士の介入行動の高低と幼児の自発的活動の高低との組み合わせによって4つの種類に分けることができる (Weikart, 1972)。保育士の介入行動が多い場合とは、保育士が主体となり幼児の活動をコントロールする場合をいう。逆に、介入行動が少ない場合とは、幼児の活動を直接にコントロールするのではなく、幼児の自発性を尊重し環境構成を通じて幼児の活動をコントロールする場合を言う (Cheng, 2001)。また、幼児の自発的行動が多い場合とは、幼児が自発的に活動を行う機会が補償されている場合であり、少ない場合とはその自発的活動の機会が制限されている場合である。

以上の2軸より、表1のように、幼児教育の実践を“オープンフレーム”、“養護ケア”、“子ども中心”、“プログラム学習”の4つに分類することができる。例えば、保育士の介入行動と幼児の自発的活動がともに少ない保育は“養護ケア”と呼ばれる保育に分類される。日本では“放牧保育”と呼ばれる保育に相当すると考えられよう。逆に、介入行動と幼児の自発的行動がともに高い保育は、“オープンフレーム”と呼ばれる保育に分類される。

表1. 幼年期教育における理論的教育アプローチ (Weikart, 1972)

		保育士 介入行動	
		少	多
幼児	自発的活動	多	子ども中心
	少	養護ケア	プログラム学習

また、保育士の介入行動が少なく、幼児の自発的行動の機会が補償されている保育は“子ども中心”と呼ばれる保育に分類される。日本の幼年期教育では“自由保育”と呼ばれる保育形態である (森上史朗・高杉自子・柴崎正行, 1999)。逆に、保育士の介入行動が多く、幼児の自発的活動が制限されている保育は“プログラム学習”と呼ばれる保育に分類される。日本では就学以降の教室での教授形態と同様の保育形態である。以上のように幼年期教育のアプローチには複数あることが想定される。

本研究では、幼年期教育に関する信念については、Child-centered orientation scale と Basic skills orientation scale (Stipek & Byler, 1997) を用いて測定を行う。Child-centered orientation scale の評定値が

高い場合は子どもの自発的活動を補償することが好ましいという信念をもっていることを示す。また、Basic skills orientation scale の評定値が高い場合は教師中心の指導方法が好ましいという信念をもっていることを示す。Child-centered orientation scale の得点が高く、Basic skills orientation scale の評定値が低い保育者は、Weikart (1972) のいう“子ども中心”の保育信念をもっていることになる。逆に、child-centered orientation scale の得点が低く、basic skills orientation scale の評定値が高い保育者は、“プログラム学習”を好ましいとする保育信念をもっていることになる。また、child-centered orientation scale と basic skills orientation scale の得点がともに低い保育者は、“養護ケア”を好ましくとらえ、両尺度の得点がともに高い保育者は“オープンプレーム”を好ましいとする保育信念をもっていることになる。

方法

調査対象 対象者は H 県内にある専修学校の保育士養成課程に在籍する学生 71 名であり、内訳は男性が 36 名、女性が 35 名であった。対象者の年齢は 19 歳から 22 歳であった。対象者はすべて 1 年生であり、保育実習の経験や、保育士としての現場経験のない学生であった。

調査方法 調査は 2 回に分けて行われ、保育観を測定する質問紙を 2004 年 1 月に行い、性役割認知を測定する質問紙を 2004 年 2 月に行った。調査は授業時間中に集団法により実施した。調査当日授業を欠席した者については個別に調査票を手渡し持ち帰らせ後日回収する留置法をとった。

調査内容

性役割認知の測定 伊藤 (1974) が作成した MHF-scale を用いて測定を行った。本尺度は男性性、女性性、人間性が社会・自己・女性・男性にとってどの程度重要であるかとらえているかを測定する尺度である。30 項目からなり、Masculinity, Humanity, Femininity の測定用に各 10 項目が用意されている。Masculinity には例えば“冒険心に富んだ”、“たくましい”、“大胆な”、Humanity には“忍耐強い”、“心の広い”、“頭の良い”、Femininity には“かわいい”、“優雅な”、“色気のある”といった項目があった。本調査では個人の性役割観に焦点を当てたため、“あなたにとって次のような性質はどの程度重要だと思いますか”といった教示を行ったうえで、それぞれの項目について、“非常に重要である” (6) から“まったく重要でない” (0) の 7 件法で回答を求めた。

保育観の測定 Stipek & Byler (1997) が作成した Child Centered orientation Belief Scale と Basic Skills orientation Belief Scale を用いて測定を行った。前者の Child Centered orientation Belief Scale は、子ども中心の保育を行うことをどの程度重要であるかとらえているかを測定する尺度である。15 項目からなり、合計得点が高いほど子ども中心の保育を行うことを重要だとらえているとされる。なお、子ども中心の保育とは子どもの自発的活動、興味関心を尊重し、徒に保育者が彼らの活動に制限を課さない保育をいう。Basic Skills orientation Belief Scale は数や文字を教育を就学前児に行うことをどの程度重要であるかとらえているかを測定する尺度である。11 項目からなり、合計得点が

高いほど就学前児に対しても数や文字の教育を行うことが重要であるととらえているとされる。”保育を行う上で次の項目はどの程度あなたの考えに当てはまりますか”といった教示を行ったうえで、それぞれの項目について、“全く当てはまる”(5)から“全く当てはまらない”(1)の5件法で回答を求めた。

結果と考察

1. 3つの評価次元における性役割認知の評価

無回答の項目があった調査対象者24名、保育士以外の職域につくことを希望している対象者1名を除外し分析を行った。そのため分析対象者数は46名であり、内男性が21名、女性が25名であった。分析では各下位尺度(Masculinity, Femininity, Humanity)に含まれる10項目の値を合算し、それに項目数の10で除した値を各尺度の評定とした。

伊藤(1978, 1983)による先行研究では男女年齢を問わず Humanity の評価値が最も高く、ついで Masculinity, Femininity の順になることが報告されている。各評価次元の値を比較することに意味はあまりないが、本調査においても同様に、Humanity の評価値($M = 4.8$)が最も高く、次いで Masculinity の評価値($M = 4.6$)、Femininity の評価値($M = 3.3$)の順であった。

2. 性別と性役割認知との関連

本研究の第1の目的は、保育士養成課程に在籍する学生を対象として、性別により性役割認知にちがいが見られるか否かを検討することにあつた。そこで、男性女性という性別のちがいによって性役割認知が異なるか否かを検討するために、Masculinity, Femininity, Humanity の各性役割認知の得点について、性別をブロック因子とした一要因分散分析を行った。結果、いずれの性役割認知の得点についても性別のちがいによる差はみられなかった。本研究結果とは異なり、伊藤(1983)は Masculinity および Femininity の評価値に性差のあることを報告している。その性差は高校生・大学生で顕著となり、この時期には Masculinity の評価値は男性が女性より高く、逆に Femininity の評価値は女性が男性より高くなるとしている。

本研究において性別と性役割認知との関連を見出さなかった1つの理由には、保育士を職域として選択する男性の特性によるものと考えることができよう。1999年4月以降保育職に従事する者は男女問わず“保育士”という名称で呼ばれるようになり、“保母”という名称では公には呼ばれなくなったものの、依然保育職は女性職であるという意識は残っている(中田, 2002)。そのような職域を希望する男性は性別による固定的な性役割意識から幾分自由であり、男性らしい考えかたやふるまい、女性らしい考え方やふるまいといった性役割から比較的自由であるためと考えることができよう。ただし、本研究では比較群を設けていないため、実際に保育職を選択する青年男性が一般男性とは異なる性役割認知を行っているか否かを検討することはできない。また、本研究での分析対象者数は、伊藤(1983)の800名に対し46名と極めて少数であったため、本研究では本来あるはずの差を見出せなかった可能性も十分にある。今後は対象者数を増やすとともに比較群を設けることにより、性別のちがいによって性役割認知が異なるのか否か、また、保育職を希望する青年男性

が一般男性とは異なる性役割認知を行っているかどうかについて検討していく必要がある。

表 2. 性別ごとの MHF-scale の平均評定値

	MHF-scale		
	Masculinity	Humanity	Femininity
Male	4.6	4.8	3.4
Female	4.5	4.8	3.2

3. 性役割認知と保育観との関連

本研究の第 2 の目的は、役割認知のちがいにより保育観にちがいが見られるか否かを検討することにあつた。Child Centered orientation Belief Scale と Basic Skills orientation Belief Scale の 2 尺度より、各調査対象者が“オープンフレーム”，“養護ケア”，“子ども中心”，“プログラム学習”のいずれの保育信念・保育観を持っているか分類することを試みた。K-means 法を用いてクラスター分析を行ったが、2 つ以上クラスターに分類することができなかつたので、Centered orientation Belief Scale と Basic Skills orientation Belief Scale の評定値をそのまま用いて分析を行うこととした。

性役割認知と保育観との関連を検討するために、まず各性役割認知 Masculinity, Femininity, Humanity の評定値の算術平均値を算出した。各性役割認知得点に関して各算術平均値を基準に各調査対象者を上位群と下位群とに分類した。例えば、Masculinity の評定値が算術平均値より高い者は上位群、低い者は下位群として分類した。Femininity および Humanity に関しても同様の手続きにより調査対象者を上位群と下位群に分類した。後、Child Centered orientation Belief Scale と Basic Skills orientation Belief Scale 得点に関して、性別および性役割認知得点の上位・下位をブロック因子として 2 要因分散分析を行った。

結果、Child Centered orientation Belief Scale の得点に関してのみ性別の要因と上位群・下位群の要因の交互作用効果が有意水準に達した。LSD 検定を用いて下位検定を行ったところ、Femininity の低い女性 ($M = 2.51$) は Femininity の低い男性 ($M = 2.31$) に比べて Child Centered orientation Belief Scale の得点が高いことが分かつた ($p < .05$)。

表 3 に示したように保育士志望の学生を対象とした場合は、性役割認知と保育観との間にはあまり関連はみられなかつた。上述したように、保育士志望の学生を対象とした場合は、性役割認知においても性差はみられなかつた。本調査の結果からは、保育士として勤務する以前は男女間に性役割観および保育観には差はない。したがって、新しく保育所で勤務し始めたばかりの男性は必ずしも女性職としての保育士像から逸脱した存在ではないと推測される。中田 (2002) は男性保育者像あるいは男性保育者としての役割は周囲によって創造されるものであると主張しているが、菊池 (2002) の指摘するように現在の保育現場が男性保育士に大きな重圧を与えているということが事実であり、その重圧が男性保育士自身の発揮する男性性によるものであるとするならば、その男性性は勤務し始めてから周囲の期待により形成された傾向である可能性は高い。つまり、“男性保育士”は保育という特定の文化・歴史をもつた環境において“創造” (中田, 2002) されている部分もある

のではないであろうか。

表3. 性別ごとの MHF-scale の平均評定値

Basic Skills orientation Belief Scale			
	MHF-scale		
	Masculinity	Humanity	Femininity
Sex (1)	.01	.03	.98
Level (1)	.01	.31	.34
S × L (1)	.18	1.28	.77

Child Centered orientation Belief Scale			
	MHF-scale		
	Masculinity	Humanity	Femininity
Sex (1)	.49	.45	.59
Level (1)	1.30	.38	.59
S × L (1)	.38	.12	.04*

注：アスタリスクは該当効果が有意水準 ($p < .05$) に達したことを示す。

引用文献

- Cheng, D. P. (2001). Difficulties of Hong Kong teachers' understanding and implementation of 'Play' in the curriculum. *Teaching and Teacher Education*, 17, 857-869.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 伊藤裕子 1983 青年期における性役割および性役割期待の認知 教育心理学研究, 31, 146-151.
- 柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知Ⅱ 教育心理学研究, 20, 48-58.
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知Ⅲ 教育心理学研究, 22, 1-11.
- 菊池政隆 2003 男性保育者に対する態度—女性保育者・保護者・学生からみて— 保育学研究, 40, 205-211.
- 森上史朗・高杉自子・柴崎正行(編) 1999 幼稚園教育要領解説 フレーベル館.
- 中田奈月 2003 「男性保育者」の創出—男性の存在が職場の人間関係に及ぼす影響— 保育学研究, 40, 196-204.
- Stipek, D. J. and Byler, P. (1997). Early Childhood Education Teachers: Do They Practice What they Preach? *Early Childhood Research Quarterly*, 12, 305-325.
- Weikart, D. P. 1972. Relationship of Curriculum, Teaching, and Learning in Preschool Education. In Stanley, J. C. (Ed.), *Preschool programs for the disadvantaged*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University

Press.

資料 1

児童福祉法第 13 条第 1 項の規定を男子について準用

第13条 児童福祉施設において、児童の保育に従事する女子を保母といい、左の各号の一に該当する者を以てこれに充てる。

- 一 厚生大臣の指定する保母を養成する学校その他の施設を卒業した者
- 二 保母試験に合格した者（中略）

第22条 第 13 条第 1 項の規定は、児童福祉施設において児童の保育に従事する男子について準用する。

附則（昭和 52・3・15 政令 27）

- ① この政令は、公布の日から施行する。
- ② この政令の施行前に第 13 条第 1 項第一号の施設を卒業した男子は、この政令の施行の日に、改正後の第 22 条において準用する同号に該当する者となつたとみなす。

（指導教官 山崎晃）